

物心の關係に就いて (承前)

上 田 大 助

五

以上は廣く物一般と心との平行 (Psychophysical Parallelism) に就いて考察したのであるが、猶「平行」の事に關して特に身心の關係 (Psychophysiological relation) に就いては如何と言ふに、吾人は今日の心理學、哲學(直接經驗說)の成果から大凡次の如くその結合(「身心の一如」)が結論し得られるではないかと考ふるのである。

吾人は前節に於て心(心作用心状態)を伴はない「物」、心と結合しない物の存在し得ないこと即ち物のある所、其處に必ず心の之れに伴ふべきことを見たのであるが、今之れと反對に物を伴はない心(心作用心状態)と言ふものがあり得るであらうか。今若し身體が無ければ外界

(物的外界)も亦無く、一切の「物」があり得ない。若し其處に何等か「物」ありとすれば必ず同時に身體が存在しなければならぬと言ふことは今日の生理學心理學の充
分明かに示す所である(身體と外界とは左様に緊密に關係結合されてゐるのである)。夫故此處に「物」を伴はない心があり得るであらうかと問ふことは又同時に身體無き心或は經驗があり得るかと問ふことである。

却説然らば全く身體無き心或は經驗と言ふものが果して有り得るものであらうか。今若し身體無しとすれば吾人の經驗は(今日の生理學心理學によつて)少くとも次の如きものとならなければならぬことは甚だ明かであると思ふ。即ち(一)外界無く、一切の物的知覺的經驗無し(一切の質的並に空間的知覺が無い)。(二)總て行爲行動と言ふことが全く無い。(從つて善行爲と言ふこ

とがあり得ない。(三)他人の身體(それは外界の「物」の一部に外ならぬ)も亦無きにより他人との交通が全く杜絶する(通常他人との交通が表情表出に依るものであることは言ふ迄もないことであるが、心靈學等の所謂靈との交通にも物質的媒介を缺くことは出来ない。今日「心靈現象」として知らるゝ現象は總て例外無く物質現象を伴ふのであり、その所謂「靈」なる者の存在其者が實に物的知覺に依つて、たゞ之れのみによつて吾人に知られ或は信ぜられるのである。而して認識論上總て他人はその身體を機縁として措定樹立せざるゝ構成的所産であることは此處に再述する必要もないことと思ふ。外界無き所に遠感^{アハシム}、透視等の如きことのあり得ざることも亦甚だ明かである。)従つて道德、宗教(人格神を信する積極的宗教)等の對人的關係が總て不成立となる。即ち善(上記の意味の)と言ふことが總て無きこととなる。(此故に身體無き靈魂を認むると言ふことは普通に考へらるゝ如く宗教を肯定する所以とはならずして反つて之れを否定することとならなければならぬと考へられるのであ

物心の關係に就いて

る。マクドガルの如きは物心平行説を以て宗教を危くするものと考へるのであるけれども、吾人は身體を離るゝ靈魂を認むることこそ反つて眞に宗教を危くするものではないかと思ふのである。若し宗教に於て靈魂の存續を説く必要がありとせば、それは必ず身體を伴ふ靈魂でなければならぬと思はれるのである。(四)一切の美と藝術とが不可能となる。何となれば美及藝術は常に「感覺」(即ち物)を必要とするからである。(五)物質に關係ある一切の學術(物理學、化學等所謂自然科學のみでなく經濟學、社會學、倫理學、美學等)「物」に關係ある一切の學が總て不可能となる。(六)多くの數學がまた不可能となる。何となれば數學にも感官知覺が必要であるからである(ポアンカレ「科學と臆説」、マツハ「感覺の分析」等参照)(七)一般に「高級なる思想が不可能となる。何となれば思想殊に高級の思想と言語との不可分の關係は今日一般に認められてゐる所であるが(ヴェント、ティチエナー、ラッセル等参照)、その言語には必ず生理機關を必要とするからである。」「思考者は能動的注意狀態に於て彼の

主題に達し、要點々々に加工し、最後にその努力の結果として言語的結論に達する——畫家が彼の心像材料の集塊に臨み、不撓の苦心の時期の後に彼の繪畫を製作するのと全く同様に」⁽⁸⁾と言ふは至言であると思ふ。(八)夢の如き經驗を成すことも出来ぬ、何となれば夢にも身體を要することは今日充分知られてゐる所であるから。(九)心理の諸狀態に就いて見るに(イ)感情は常に感覺に伴ふものであるから感覺(物)なき所には感情も亦あり得ないとせられなければならない。(特に情緒と身體との不可分的關係に關してはジェームス・ランゲ説の如きものがあることは言ふ迄も無いことであらう。)(ロ)意志は常に必ず表象と行動とを伴ふものであるから、「物の無い所には意志が成立たずとせられなければならないであらう。(而して今日意志のかゝる具體性の故に意志を以て感覺表象感情等とは異なる一つの獨立なる心的要素と見做さない心理學者をも見る事は周知の事である。)(ハ)觀念は知覺と等しく感覺の群である。故に感覺「物」無き所には觀念が無い。(知覺と觀念との間に根本的差

異の認め得られざることは今日心理學の明かにせる所である。)(ニ)従つてまた想像が無い。(ホ)統覺は一つの表象であつて之れには必ず知覺表象又は記憶表象が伴はなければならない。即ち必ず「物」が伴はなければならないのである。(ヘ)思考は前述の如く言語と不可分離であるが、言語には必ず生理機關を必要とする。(ト)記憶(ベルグソンによつて純精神的とせられる所の記憶)は如何と言ふに、記憶が常に知覺と結合してのみ經驗せられるものであることは今日一般に認められてゐる所であり、又知覺にも常に記憶が同伴し、現實具體的の知覺表象と記憶表象とは畢竟たゞ程度の差に過ぎざるものとせられてゐることも亦周知の事であらうと思ふ。然らば「物」を伴はざる記憶は考ふことが出来ないと言はなければならないではなからうか。(ベルグソンの如く「純粹なる記憶」⁽⁴⁾を考ふるものと雖も現實的經驗としてはそれが常に知覺と結合すべきものであることを認めてゐるのである。)⁽⁵⁾ベルグソンは「精神力」に於ては物質を離れた心の存續を説くが如くであるけれども、「物質と記憶」の範圍

に於ては反つて物質と記憶との一如不可分的關係が力説されてゐるではないかと思はれるのである。(チ)身體が無ければ一切の外界一切の表象が無く、又生理機關も無いのであるが、かゝる所に時間の知覺を考ふることは甚だ困難ではなからうか。少くとも明瞭なる時間意識の無いことは確かであらう。(時間知覺に對する生理機關の重要性は今日廣く認められてゐる所であつてゾントは時間表象の發達の起源は觸官にありとなし、又之れを心理的に説明して感覺と感情との結合に依るとなしてゐる事は廣く知られた事である。然らばそれは身體無き所また時間無しと言ふに等しいのである。マッハによつては「時間表象が空間表象と共に吾人の傳受せる身體組織によつて制約されるものであることは今日殆ど疑ふことが出来ぬ」⁽⁷⁾と言はれてゐる。吾人は身體無き所時間も亦無しと考へ度く思ふのである。(リ)識態、Bewusstseinslage は普通に感情の一種とせられるのであつて元より感覺と不可分離でなければならぬことは言ふ迄もないことであらう。かくの如くに見來る時は「物」即ち知

物心の關係に就いて

覺を虚無しては殆ど總ての心的狀態が不可能となるではないかと考へられるのである。(スタウトも "Without sensation and motion the process of consciousness would be impossible;"⁽⁸⁾と言つてゐる。今若しブレンタノの如く表象を以て一切的現象の基礎となし得るとせば、一切の心的現象が必然物質を伴はなければならぬと言ふことが當然言ひ得られなければならぬのである。)

以上の如き諸事實より考ふれば身體無き經驗、或は心の存在は甚だ考へ難いことであつて、身體無き經驗(或は心)を有りと考ふるよりは無しと考ふる方が遙かに考へ易いと思はれるのである。ベルグソンは「意識の殆ど全部が身體に對して獨立してゐる」と言ふことから身體滅後の心の存續を確信せんとするものであるけれども、⁽¹⁰⁾吾人は之れと反對に(一)意識の殆ど全部が「物」(従つて身體)と(一如に)結合せられてゐると言ふ經驗的事實の認識と(二)完全なる物心一如の理念要求と(三)善及美並に多くの學術(眞)に對する要求等から身體無き心の存續を否定し度く思ふのである。(ベルグソンに於て

は一方身體滅後にも依然外界ありとすることに誤りがあると共に他方心のみの存續を考ふることに同様なる誤りがあると思はれるのである。腦は唯身體運動の事に關するのみで、記憶思想等多くの心作用が多く之れに獨立である等と言ふことも今日の科學の承認し能はざる所であらうと思ふ。吾人は元より未だ「完全なる物心一如」を経験的事實として確證するには至つてゐないのであるけれども、然し身體無き經驗の恐らく存し得ないであらうと言ふことは右の如くして充分確實に言ひ得らるゝではないかと思ふのである。今假りに今日或は將來の心理學によつて吾人の經驗中「物」と直接對應せざる(全く遊離の)心作用或は心状態の存在することが發見確定され得たとしても(マクドガルの如きは今日既にかゝる遊離の心作用あることを説かんとするものの如くであるが)然し吾人が身體を滅したる後に於ても猶その心作用心状態のみが(他の心作用心状態との關係を離れて)單獨に存在し得るものであるか否か(即ち「物」と全然無關係であり得るか否か)は甚だ疑問とせられ得るの

であつて、心が常に心々相制、物心相制の有機的一如體、一連續體(所謂統一體 *Einheit*)としてのみ現實に經驗せられること並にその殆ど全部が「物」と一如に結合してゐること等から考ふれば吾人は寧ろその反對(即ち「物」及他の多くの心作用と全く相離れたる斷片遊離の心作用の存在し得ざること)が選ばれなければならぬものであらうと考ふるのである。(人或は心靈學等の研究によつてかゝる遊離孤立の心作用あることを確め得と考ふるならば、それは大いなる誤りである。何故とならば前にも述べたる如く物質現象を外にして「心靈現象」なるものはあり得ないからである。)かくして吾人は身體無き經驗はあり得ず、何等か經驗(或は心)ある所其處には必ず身體(何等かの形の)が無ければならぬと考ふるのである。(若し靈魂の不滅が考へられるとすれば同時にまた身體が不滅でなければならぬと思ふのである。)身體無き境は所詮佛敎の所謂涅槃、無餘涅槃の如きもの(即ち無)でなければならぬと考へられるのである。

(今假りに、身體無き心即ち經驗があり得たとしても、

その經驗、その心は(一)内容が甚しく貧弱である。(二)實行方を缺く全く無方のものである。(三)甚だ低級低價値なる存在である。(四)従つてかゝるものを宗教の對象或は憧憬の對象となすが如きは甚だ誤れるものであると思ふ。(五)心の變化性相制性等に鑑みてそれが相當時間持續する存在としては甚だ考へ難い。即ちそれは極めて屢々物質化する所の甚だ不安定なる幻滅的存在體でなければならぬ——と言ふのは多くの心状態は常に「物」を伴ふべきものであるからである。(六)それは全く孤獨孤立である。他人と一切交通せざるものである。否他人が全く存在しないのである。

今日心靈學に所謂心靈 spirit なるものも全く身體無きものであるか否かは疑はしいのであつて、不可視的な身體を有つとも考へ得られるのである。而して實際今日の心靈學では長期に互る注意深き實驗觀察の結果一般にかゝる不可視なる身體——所謂「幽體」(aerial body)——を認むることに一致して居る様である。

「精神の座」の問題に就いては精神(心)は非空間的者

物心の關係に就いて

であるからそれは空間の或る一部或は一點等に局在すと見ることは許されざることであつて、従つてそれが或は松果腺に存在すとか或は大脳皮質部に存在す等とすることの總て誤りであること特に言ふ迄もないことであらう。心は既述の如くあらゆる知覺に即し、之れと結合して存在するのであり且つそは一つの「單一體」であるから、それは當然(經驗する限りの)全宇宙に遍滿して坐すとせられなければならぬのである。(從來に於てもスコラ哲學の如きによつて心の非空間性及單一性からそれが身體の或る一局部にではなく全身に宿るものとせられたことがあるが、吾人は更にそれは全宇宙に、其の各部に密着して坐すとせられなければならぬと思ふのである。従つて從來の "union of soul and body" はまた union of soul and world or cosmos に擴張せられなければならぬと考へられるのである。)然らば身體の一部たる腦に就いては如何と言ふに、腦は唯物界の一部(その一小部分)に過ぎないのであるから、精神が唯其處にのみ局在するものでないことは元より上に述ぶる

所の如くである。然し同時にまた他方腦は全知覺従つて又全宇宙(物的宇宙)の條件であつて知覺及物界一般の構成機構の最重要なる成素を成すものである。とは今日の生理學心理學の充分明かに示す所である。故に等しく知覺物の一部、宇宙の微小部分に過ぎずとは言ふもののそれが實に全知覺全物質界の死命を制すると言ふ點に於て他の部分とは充分區別せられるのである。(ヘルグソンの如く之れを他部と同列視して輕視することは許されないのである。)^⑩此意味に於て腦を精神の座と稱することは差支ないことであらうと思ふ。然し茲には元よりジェームスの所謂 figure of speech に過ぎないものである。

- ① W. McDougall, Body and mind, Chapt. XIV; p. 356
- ② B. Russel, The analysis of mind.
- ③ Titchener, A primer of psychology, 1899, Chapt. XI, §89.
- ④ Bergson, Matter and memory (English translation), p. 170, &c.
- ⑤ *ibid.*
- ⑥ Bergson, Mind-energy (English translation), p. 57; p. 78; &c.

- ⑦ E. Mach, Erkenntnis u. Irrtum, S. 425.
- ⑧ Stout, Manual of psychology, p. 34.
- ⑨ Brentano, Psychologie, Zweites Buch, Erstes Kapitel, § 3; Zweites Buch, Neuntes Kapitel, § 2; &c.
- ⑩ Bergson, Mind-energy (English translation), p. 59.
- ⑪ W. McDougall, *op. cit.*
- ⑫ Bergson, Matter and memory (English translation), p. 4.
- ⑬ W. James, Principles of psychology, Vol. 1, p. 215.

六

次に「相制」の問題であるが、此場合にも先づ始めに必要なことは其の相制の意義を明かにすることである。然らば其の相制或は交互作用 Interaction; Wechselwirkung とは如何なることを謂ふのであるかと言ふに、それには先づ靜的と動的との二つの意味が區別せられなければならない。前者は例へば作用反作用の關係の如く相互に靜的依存關係を形成する場合が即ちそれであつて別に時間の概念を含まないものである。従つてそれは因果の概念を構成しない。カントの「純理批判」中(「經驗の類推」)に於て交互作用と稱せらるゝものは即ちこれであ

あつて特に時間的關係を示す因果と區別せられてゐることは廣く知られてゐることである。反之後者は時間概念を含むものであつて相互に因となり果となる關係を謂ふのである。而してこれが特に普通の因果關係と異なる所はそれが交互に因となり果となる所即ち普通の因果概念に更に「交互に」と言ふ交互概念が加はる事にあるのであると考へられる。(吾人は生物學歴史等に於ては常にかゝる交互概念に遭遇するのである。)今物心論に於て問題となる相制は所謂精神物理的因果の說として常に因果概念を含むものであるから、それは言ふ迄も無く前者(即ち靜的關係)では無く後者でなければならぬことは甚だ明かである。前者は因果では無く對應(或は結合)である。従つてそれが時間的關係に於て考察せられる場合には「相制」では無く「平行」を形成すべきものでなければならぬ(第四節)。故に物心論に於て相制と言はゞ専ら後者即ち動的因果關係が意味せられなければならぬことは甚だ明かであらう。猶此外にまた伴差 *comitance* の關係が相制と稱せらるゝことがあるけれど

も(朝永三十郎氏、哲學辭典「等」、これも亦實は一種の對應の關係に外ならぬのであるから、物心論に於てはこは相制と名づくべきでは無く同じく「平行」として取扱はなければならぬものであると考へられるのである。茲に元より伴差の關係は之れを因果の關係と稱し得る場合もあり得るであらう。物理學に於ける場合の如きは即ち之れである。此場合には伴差は函數的な因果關係を成すのである。然し物理學に於けるかゝる函數的因果關係は別に「交互に」と言ふ交換概念を含むことが無い。唯その函數的な對應關係が問題とせられるのである。然るに物心の相制或は精神物理的因果關係と言ふ場合には交互に因となり果となると言ふことが要求せられるのである。即ち或る場合には「物」が、他の場合には「心」が因となり又果となることが意味せられてゐるのである。而して此場合更にその因を成すものと果となるものが互に「異質的」であつて、物理學に於けるが如く同質或は同類的でないと言ふことがまた特に此因果關係の特色として注意せられてゐるのである。従つて物心論に於ける

相制の問題にはかゝる物理學上の因果とは異なる「異質的」因果關係が如何にして可能であるか、それは果して充分合理的であるか否か等が考察されなければならぬのである。吾人は「相制」と言ふことを右の如く規定して以下考察を進め度いと思ふ。

却説然らばかゝる精神物理的因果即ち相制は如何にして可能であるか。それは果して合理的であるであらうか。茲にそれが古來經驗的事實として常に認められてゐるものであることは毫も疑ふことの出来ない事實である。それは素朴的に太古以來甚だ久しく認められてゐる所であり、又近代の學術意識によつてもそれが經驗的現象的事實として確實であることは充分認められてゐる所の事である(例へばウケンデルバント、エルサレム、ニコライ・ハルトマン、ブレンタノ、ジュームス、スタウト、ストロング、ゾンメル等々々。^①醫學等に於ても實際的には之れを認めてゐるものと思ふ。)「健全なる悟性或は常識は常に之れを認むとせられてゐるのである。(「平行的」事實を認むることは左様に容易ではなかつたので

あるが「相制」の事實は極めて明瞭であり従つて素朴的意識によつて極めて早くから認められたものであらうと思はれるのである。)事實がかくの如きにも不拘近代之れが問題とせられ疑問とせられるのは如何なる理由に依るものであるかと言ふに、それは主として近代物理學の因果概念なるものが之れに反對し、またそのエネルギ―不滅則が之れに反對するからであると思はれるのである(從來相制説否定の理由として挙げられる所は殆ど皆之れである)。而して之れによつて所謂本體論的形而上學的考察なるものが動もすれば相制の現象的經驗的事實を以て假理或は虛妄のものなるかに解せんとする傾向を生ずるに至るからである。夫故に相制の可能的證明には先づ此二つの事に向つて主たる考察が施されなければならぬ。然るに今本論の如く直接經驗の立場に立つものに於ては經驗的は即ち本體論的、本體論的は即ち經驗的であるから、經驗的事實と本體論的事實との對立區別は消滅し、總て經驗的に認めらるゝ所即ち本體論的事實となつて、經驗的以外別に何等「本體論的考察」

なるものを必要としないのである。従つて其處には唯その「相制」が物理學的因果と何等矛盾することなく充分合理的に(また上に樹立せられた平行説とも矛盾することなく)樹立基礎付けせられ得るか否かが主たる問題として残ることとなるのである。

然らば今本論の直接經驗説に於て此精神物理的因果は如何に説明せられるであらうか。吾人の直接的なる經驗に於ては總べてが性質的であり且つ總てが常に移動推移去來しつゝあるのであるが、今その移動推移の過程中に於て時間的前後を爲すものの間に若し理由と歸結との必然的關係が認めらるゝものがある場合に吾人は之れを因果の關係と稱してゐるのである。(因果には唯時間的繼起の必然的關係のみでなく更に理由と歸結との必然的關係が必要である。單なる理由歸結の關係を時間關係を意味する因果と稱することの出来ないことは勿論であるが、また單に時間的前後の必然的關係のみでは未だ充分でないのであつて更に理由歸結の關係が加はることを要するのである。而して茲に吾人は因果關

物心の關係に就いて

係のかゝる解釋は一般に承認さるべきものであると思ふのである。以下此解釋に従つて考察することとする。) 然るに今吾人の實際の經驗に就いて之れを觀察する時吾人は常に物々間、心々間及物心間に於いてかくの如き因果關係の極めて多くを見出すのである。即ち物々間としては外界事物相互間、外界と身體との間、身體と神經系統との間、神經系統と外界との間等、心々間としては諸知情意狀態相互間、また物心間は以上諸種の「物」と「心」との間に於て常に右の如き因果關係を見出すのである。物々間の因果に就いては此處に特に言及する必要もないことと思ふのであるが、心々間の因果に就いては例へば「意志が感情に支配せられる」とか或は「緊張の後には必ず弛緩が来る」等は即ち之れである。(吾人は心的因果とは實にかゝるものに名づく可きものであつてゾントの所謂心的因果の如きは眞の意味の即ち上に定義せる如き意味の因果とは稱し得られないものと思ふ。又ミユンステルベルグの如きは心的因果は不可能であるとなすのであるけれども、吾人は上記の例に於ては時間

的前後の必然的關係と理由歸結の必然的關係とが共に物々間に於ける因果關係と全く同等に心々間に認められ得と思ふのである。)物心間に就いても全く同様である。従つて物心相制は物々相制心々相制等と相並んで萬物相制の一般的事相を形成するのであつて、何等特別なる例外を作るものではないのである。(物々心々物心間、眞善美の諸對象並に意識相互間等不斷に相制しつゝあることは吾人の常に經驗しつゝある所である。吾人は從來「萬物相關」なる語を有するのであるが、更に「萬物相制」なる語を用ひてその動的關係を言表する事が便利或は必要ではないかと思ふのである。)然るに本論の如く知覺(それは一面常に心である)を「物」とすることから言はゞ或る意味に於て經驗は總て心であるとも言ひ得られるのであるから、物心相制は又實に心々相制の一つの場合に過ぎざるものとも言ひ得られるのである。即ち或は知覺(心)と感情乃至意志との關係(美しき花を見て取らんと欲するが如き場合)、或は意志と知覺(心)との關係(花を取らんと欲して運動を起し之れを取る場

合の如き)等と稱し得られるのである。(従つて此意味に於て物は總て心の如く、心と共に動くとも言ふことが出来るのである。)かくの如く相制は物々間物心間心々間に於て常に間斷なく行はれつゝあるのであるが、然し他方經驗の全體に就いて注意觀察すればかゝる相制の生起すると否とに不拘物心の一如體は心の側もまた物の側も共に「連續」として一瞬の中斷も無く進行推移しつゝあるのである(第四節)。故に相制因果の現象は言はゞ水面の波の如きものであつてその因果の波を樣態様相の一部としつゝ水即ち經驗は(常に物心一如として)中斷なき進行を續けつゝあるのである。即ち物心の因果相制は物心の一如平行の基礎(基礎)の上にその一樣態一事相として成立するのであつて、何等平行と矛盾するものではないのである。故に精神物理的因果の關係に立つ心と物とは夫々各の側に於て常に心的及物的の前件と後件とを有するのであるが(心は心の前件及後件、物は物の前件及後件を有つ)、特に著しく經驗さるゝその心作用心状態とその物的状態とを(言はゞ斜め

に) 選び取つて之れを因果必然の關係として定立するのである。(故にその心が物的現象の推移を中斷すること
もなければまたその物が「意識の流れ」を中斷すること
もないのである。物心の不斷連續の平行 (Parallelgehen)
中に於てその特定な心とその特定な物とが因果として
斜に結び付けられるのである。) 今此關係を例示せんに、
今少許のアルコールを飲んで愉快を感ずることありと
せよ。然らばその愉快はアルコールを飲むことの後によ
れを前件とし又理由として生じたのであるから、そのア
ルコールを飲むと言ふ行爲はその愉快の原因と見做さ
れ得るのである。然し此時このアルコールを飲むと言ふ
物的現象の以前にも又その以後にも物的現象は(外界
にも亦身體にも)中斷なく持續して居るのであり、又心
の側に於ても同じくその愉快の以前にも又その以後に
も心的状態は間斷無く推移しつゝあるのである。即ち
其處には中斷なく物心の平行が行はれつゝあるのだら
う。たゞその「平行」の内に於て物の側の或る特殊現象
(アルコールを飲むこと) と心の側の或る特殊現象(愉

快) とが採擇せられて、それが時間的及論理的必然によ
つて因果の關係として定立せられるのである。而して猶
此場合そのアルコールを飲む事の心的後件たる愉快と
その(アルコールを飲むこと) 物的後件たる脳神系興
奮とは伴差平行の關係を成すことは一般に認められて
ゐる所である。(茲にアルコールを飲むこと即ち其の行
爲は愉快を生じた原因であるが、脳神經の興奮はその愉
快の原因ではない。理由根據として之れと伴差平行する
に過ぎないのである。之れを理由と言ふ意味に於て原因
と稱することは或は差支ないことかとも思ふのである
が、之れを精神物理的因果の意味に於て原因と稱するこ
とは許されないのである。而して此場合そのアルコール
による神經興奮が始め愉快の感情に先き立ちほしない
か等と言ふ疑問の提出すべからざるものであることは
第四節末に於て述べた所の如くである。) 心が(前件とし
て) 或る物的状態の原因と考へらるゝ場合も全く之れと
同様である(例へば大なる精神的喜悅によつて胸の高鳴
りを感じそれが暫らく持續する場合の如き)。刺戟と感

覺の間」も、その刺戟を直接なる性質的物とする時は精神物理的因果となる。) かくの如くして物心の相制は平行と何等矛盾することなく兩立し得るのである。而して「平行」は基礎として常に連續を成すのであるが、「相制」は點的なる出來事としてその上に生起するのである。(此點的性質に於て精神物理的因果は歴史的因果と類を同じくする。) 而してかくの如き精神物理的因果はまた物理學とも何等矛盾抵觸することなく良く兩立し得るのである。と言ふのは既に屢々述ぶる如く吾人の(直接的に經驗する所の物(物質)、従つて物心關係の考察に於て取らるべき「物」は純性質的であつて、その性質的物界と計量的物理學の世界とは全く次元を異にする世界を成すからである(第二節)。(前者は直接な現實 real) であるが、後者は間接抽象の一構成 “imaginary” である。) 従つて前者の世界に於ては物理學の法則に反することが可能であることも既に述べた所である。(其處には無より有を生ずるのであり、又その「有」も常に増減變化しつゝあるのである。従つてエネルギーの創成増

減に相當することが常に見られるのである。「原因は結果に等し」或は「エネルギー不滅」等は唯抽象構成の產物たる物理學の世界内に於てのみ通用し得ることなのである。) 夫故此處に精神物理的因果と言ふも、その物理的 physical) は物理學 (physics as mathematical science) 的と言ふ意味では無く、直接なる性質的物を意味するのである。かくの如くして吾人は「物」を直接なる性質的物とする精神物理的因果は平行説とも又物理學とも何等矛盾することなく充分合理的に成立し得るものであると考へるのである。(茲に猶かゝる性質的なる因果關係は右の精神物理的因果以外他にも甚だ多く見出されるのであるが何れもかくの如くして基礎付けらるべきものであると思ふのである。即ち例へば善に關するものとしては道德的因果があり、また宗教に關しては宗教的因果があつて例へば神に歸依することによつて祝福を感じる等の因果關係が考へられる。又美に關しては美的對象に面接することによつて美感を生ずるとか或は反對に美的觀照の態度を取ることによつて對象が美

化せらるゝ等の因果關係が定められるのである。學術に關しては古くは「第一原因」とか或はアリストテレスの四因説等があり、近代に於ては生物學的因果歴史的因果等がある。殊に歴史的因果は今日嚴密なる科學的事實として承認せられてゐる所の事であるが、その歴史的因果は人と人との關係及人と物との關係として先づ精神物理的因果を前提するに非ざれば成立することを得ない概念である。従つて吾人は歴史的因果承認のためにも精神物理的因果は必要であると考へられるのである。歴史が「現在」に於て現在の直接經驗から導かれた一構成的所産であることは曾て述べた所である。かく吾人は眞善美の總ての方面に互つて性質的因果の甚だ多くを有するのであるが、かゝる性質的なる因果概念こそ眞に因果と言ふに價するものであらうと思はれるのであつて、近代學術の動もすれば唯一の因果概念なるかに考ふる物理學的因果は唯伴差の函數的關係に過ぎずして吾人の太古以來有する本格的なる因果概念とは遙かに遠く隔たるものではないかと考へられるのである。

物心の關係に就いて

派生的二次的なる物理學的因果概念のみを取つて其の本たる基礎的原始的なる性質的因果を捨つことはまた同じく本末を顛倒するものでなければならぬと思はれるのである。

以上述ぶるが如くして吾人は「物」を直接なる知覺とし従つて之れを性質的とする古代以來の素朴的相制觀は充分合理的に成立し得と考ふるのであるが、之れに反して物を計量的機械的とする近代の相制説(機械觀的相制説)は總て背理として排撃せらるべきものであると思ふのである。純計量的なる物理學の世界に於てはその現象の推移、その因果關係の連鎖の内には「異質的者」非物質的者の參加を絶対に許さないのであつて、エネルギー不滅則の犯さるゝ事は勿論また如何なる意味に於ても異質者の參加を許さないのである。故に例へばハンス・ドリーシュ(或はラインケ)等がエンテレヒー(或はドミナント)の如きものを假定し、之れを以てエネルギー不滅則を犯すことなく物理學的世界に作用せしめんとするが如きことも許されないのである。(物理學的世界以外の物界、物理學的世界以上の物界に於ては物理學の

法則を犯すことも元より自由であるが、物理學の世界内に於ては絶對にその法則に服従しなければならぬのである。従來の物心論は吾人の所謂素朴的相制觀と近代の機械觀的相制説とを殆んど區別する所が無いのであるけれども、此二者は嚴に區別すべきものであつて、前者は合理的に、従つて平行説とも矛盾することなく(兩立として)成立し得るに反して後者は物理學に牴觸するものとして極力排撃せらるべきものとなるのである。(今日マツハ、ベルグソン等は性質的物を認むることは既述の如くであるけれども別に之れによつて相制説を樹立せんとするものではない。)生物學に於ても物を物理學的機械的物とせずして性質的物とする時は相制説が可能となり、従つてまた所謂生氣説が可能となる(別に不可知なる原理によることなく)。元より生物體も物界の一部(その連續的一部 integral part)として其の内には物理化學によつて取扱はるべき部分(或は瞬間)を有することもあり得るけれども(但し此場合には體系の孤立化が一般に一層困難となるから法則の近似及蓋然度は一般に一層粗とならなければならぬと思はれるのであるが)、生物學はより直接なる學として主として生物の性質的物的現象を觀察すべきであり又「有機體」として常に生物體の全體が考察されなければならぬのであるから(全形態全過程を觀察する場合は言ふ迄も無く、その一部分を觀察する場合に於ても)、其處に全性質的物界に對する場合と同様に物理學の限界を越ゆるものがあり得ることも亦容易に考へらるゝ事である。(今日の生物學生理學の内には物理化學によつて説明し得られざる多くの部分を有するのであるが、此等のものの内には原理上如何にしても物理化學のみを以てしては説明し得られざるものが多いかと思はれるのである。外界を機械的物理學的とし身體のみを性質的非機械的とすることは甚だ困難であるけれども、外界を性質的非機械的とする時身體を共に性質的非機械的とすることは甚だ容易でなければならぬ。と言ふのは身體と外界とは極めて緊密一如に結び付けられてゐるものであるからである。)のみならず全物界中に於ても

心と最も密接に關係付けられて居り従つて心と共に變化することの最も多きものは身體であるから、全物界中に於ても最も非機械的なるものは身體でなければならぬであらうと言ふことも亦必然考へられることである。従つて其處には「自動機械説」は最早や全く成立し得ざることとなる。(從來動もすれば平行説と自動機械説とは殆ど同義なるかにも考へられてゐるのであるけれども、眞の平行説と自動機械説とは反つて相容れないものなのである。)

(結論)

以上の考察から吾人は少くとも次の事を結論し得ると思ふ。(一)「物」を知覺とし性質的として常に直接なる經驗に立つ時、平行説も相制説も共に成立す。然し物を機械的物理學的のものとする限り平行説も相制説も共に成立せず。(故に平行説と相制説との共に排撃すべきものは物理學的機械的世界觀である。物心論を空しき形而上學の思辨に導くものも此間接抽象なる物理學的機械的世界觀に外ならぬと考へられる。間接なる他人の心

物心の關係に就いて

を直接なる自己の心と同等同列とすることから一般哲學が必然形而上學の思辨に導かるゝことに就いては、哲學雜誌第五百六十九號所説の如くであるが、又同じく間接抽象なる物理學的物を直接なる心と同等同列或はより基礎的とすることから物心論が直接を離れて遠く形而上學の迷宮に導かるゝこととなるのであらうと考へられるのである。(二)「平行」(對應)は或る範圍は假設(信仰)であるけれども或る範圍は説(理論或は假説 Theory or Hypothesis)では無く確たる經驗的事實である。(三)「相制」は毫も假説では無く全然たる經驗的事實である。而して此處に經驗的事實は又同時に本體論的事實である。(四)「平行論と相制説とは何れも事實の説明の爲に設けられた根本假定である」となすが如きは此等兩説を共に不確實ならしむるものである。(四)「平行」は實在(或は經驗)の基體的なる事相であるが、「相制」はその基體上に於ける特殊的事象である。(前者は連續、後者は點的)。(五)生物學に於ける自動機械説は成立せず。生氣説が成立し得。(物心平行の故のみならず又その相制

の故に、心理學は常に生理心理學でなければならぬと考へられると共に、また他方生物學は常に心理學を豫想しなければならぬと考へられるのである。(六)身體な經驗、或は心は考へ難し。

- ① Windelband, *Einführung in die Philos.*; Jerusalem, *Einführung in die Philos.* (6te Aufl., S.204; S. 206); N. Hartmann, *Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis* (31. Kapitel); Brentano, *Psychologie vom emp. Standpunkt* (Erstes Buch, Erstes Kapitel, §1.) W. James, *Principles of psychology* (Vol. I., p. 5; p. 144); Stout, *Manual of psychology* (p. 34); Strong, *op. cit.*; Gr. Sommel, *op. cit.* (S. 8)
- ② 古へはオッカム論があり、今日では Strong (*op. cit.*, p. 345), N. Hartmann (*op. cit.*, 51 Kapitel) 等が之を述べらる。
- ③ Eisler, *Wörterbuch*; J. R. Thomson, *A dictionary of philosophy*; &c. 參照
- ④ Münsterberg, *Psychology, general and applied*, 1925, p. 36; &c.
- ⑤ Eisler, *Wörterbuch*; Windelband, *Einführung in die Philos.*; &c.
- ⑥ Hans Driesch, 'The science and philosophy of the organ-

ism.

- ⑦ J. Reiske, *Das dynamische Weltbild.*
- ⑧ W. McDougall, *Body and mind*; &c.
- ⑨ 高橋穰氏「心理學」

補說 性質的物界と計量的物界

一

今日學術上普通に「物」(物質)と言はゞ殆ど常に計量的物理學的物が考へられて居り、殊に物質の本性と言ふ場合に於ては常に殆ど獨斷的に物理學的實體(電子原子エネルギー等の)が考へられるのである。物心論に於て(デカルト以降)常に左様であつたことは本文所述の如くであるが、また生物學生理學等に於ても全く同様であつて、所謂機械説なるものが左様である計りでなく(デカルト、カント、ハックスレー等)、生氣説的立場を取るものに於ても殆ど皆左様である(ドリーシユ、ラインケ、ハルディン、エゴアルト・フォン・ハルトマン、ベルグソン等々)⑥。而して吾人の知覺は此等實體によつて誘發せ

られるもの(従つて派生的のもの)とせられるのである(カントの物自體説の如きは例外である)。然るに事實(直接經驗の事實)は之れと反對であつて、吾人に直接なる「物」、吾人の直接に經驗する「物」、従つて基礎太原たる「物」は知覺であつて計量的物理學的物は之れから(科學的方法によつて)誘導構成せられる所の間接なる構成の所産であり(従つて「本體」は後者でなく前者である)、またその直接なる「物」(それは必然性質的である)の全部がではなく唯その或る一部のみ(即ち所謂「孤立化」の可能なる部分のみが)規約(長さの相等、時間の相等等の種々の規約)によつて(唯蓋然的、近似的に)數量的關係に還元せられ得るのであること本文所述の如くである。而して物心論に於ては「物」を計量的物理學的物とせずして(心と同次元とも言ふ可き)直接なる物即ち知覺を取る時平行相制の問題が完全に解決せられ得ること本文に於て見るが如くである。かく物(物質)に直接なる性質的物と間接なる計量的物とを分かつことは物心論に取りて極めて重要(決定的重要)であるのみならず、此事はまた生物の論其他一般哲學の上にも甚だ重要であ

物心の關係に就いて

るから、以下更に補説して一層此事を明かにし度いと思ふ。

註① 元よりカントは「自然の單なる機械的關係が有機的存
在體の生産に對して何等説明根據を與へないこと」を認め、生物に於ける合目的性を認むるものではあるけれども、カントに於てはその合目的性は客觀的な「構成的原理」ではなく、唯單に主觀的な「反省的判斷」たるに止まるのであり、自然學的理想としては(之)「機械的關係の原理」を研究の根柢に置くことなしには全く何等本來的意味の自然認識なるものはあり得ない」とするものであるから、吾人は之れを生物學上の機械論者に數へなければならぬと思ふのである。(而して後のロツツェ、ワイズマン等の如き人々が何れも合目的性を認むる機械論者であつた事は廣く知られてゐることである。)

- ② H. Driesch, The science and philosophy of the organism. (p. 32; pp. 261-262; p. 279; &c.)
- ③ J. Reinke, Das dynamische Weltbild.
- ④ J. S. Haldane, The philosophy of a biologist (p. 76).
- ⑤ Eduard von Hartmann, Das Problem des Lebens.
- ⑥ H. Bergson, Creative evolution (English translation p. 13; p. 32; p. 8.) (但し「物質と記憶」中の物質觀は之れと異なる)。
- ⑦ 物理學の方法並にその蓋然性に就いてはホアンカローの

諸著殊に「科學と感説」「科學の價值」、ハイゼンベルグの諸講演參照。

二

先づ普通に物理學の對象とせらるゝ所のものから考察を始めんに、今日物理學に於ける主要なる概念は數量、時空、物質及エネルギー(即ち所謂實體)、因果概念等であるから、以下此等の事柄に就いて性質的物と計量的物との關係を考察して行くこととする。

(一) 數 及 量

數の成立には必ず單位を必要とするのであるが、その單位は太初直接に吾人に與へられるのではなく、性質的所與個物から抽象と反省によつて作られるのである。(故に物を數へるとは物を區別定立するその思惟作用を數へるのであるとも言はれて居る。)従つて數は直接なる所與ではなく、(性質的物からの)間接なる構成である。即ち數によつて性質的物が創らるゝ等の事があるのではなく、性質的物から數が創られるのである。

量も同じく性質的所與から規約(相等の規約)と比較

の手續きとによつて構成せられるのであつて、性質的空間或は物質を任意に分割しても何等量とはならぬのである(數とはなり得るとしても)。従つて量も亦太初直接に所與として(性質的所與の以前に或は之れと共に)與へられるものではなく、間接に(二次的者として、思惟によつて)構成せられるものであることが明かである。

かく「計量」の基礎を成すべき數及量が共に(直接なる)性質的所與から思惟によつて(間接に)構成せられるのである。

(二) 時 空

吾人の直接に經驗する眞の時間が純性質的であつて測定すべき限りのものでないこと、また數量的に測定し得べき物理學的時間は直接に經驗し得べき實時 real time では無く、科學によつて(甚だ間接に)構成された甚だ抽象的なる時間即ち一種の虛數時 “imaginary” time であることは既に屢々述べた所である。^①

空間も同様に直接經驗する空間は性質的であり、計量し得べき物理學的空間は規約(尺度の不變、長さの相等、

圖形の相等等の)によつて間接に成立するものであることは今日の心理學及物理學の明かに示す所である。幾何學的空間が現實のものではなく、理想的理念的のものであることは特に言ふ迄もないことであらう。

(カントの「感性論」が物理學的時空を以て感性的に直観するもの即ち直接知覚するものとなした事の誤りなることは特に言ふ迄もないことと思ふ。)

(三) 物質及エネルギー

吾人の直接に經驗する物質(従つて本體としての「物」)は知覺であることは本文所述の如くであるが、それは言ふ迄も無く純性質的である(上述(一)参照)。計量的なる物理學的物質は物理學によつて之れから構成せられた間接抽象のものであつて、現實 *real* ではなく構想虚構 *imaginary* である。(一般に數學的關係は知覺し得られず、知覺の世界に對して一種虚構の世界を成すのであるが、物理學の世界はその數量的關係の外更に時間の點に於て虚構 *imaginary* と言はなければならぬのである。)^③ 従つて物理學的物質(電子原子等)は唯物理學

物心の關係に就いて

の範圍に於てのみ通用するのであつて、物理學的取扱ひ(その方法)の及ばざる領域には之れを想定適用することは許されないのである(かくの如きは科學の意義とその限界とを無視没却するものである)。然るに物理學的取扱ひの及び得る範圍は所謂「體系の孤立化」の可能な範圍に限らるゝのであるから、従つて電子原子等の物理學的物質は唯無機界の或る一部に於てのみ想定適用せらるゝ事を得るのである。("Molecules, the foundation stones of the material universe," Clark Maxwell など總ての物質總ての性質的物を皆等しく電子原子等から成るとするが如きことは科學的に許されないことなのである。電子原子等の科學的概念が未だ充分嚴密に樹立せられざる以前に於てたゞ思辨的に物質は總て原子より成るとせらるゝ事は未開未發達の事として或は許し得るとするも、^④既に此等のものの科學的概念の充分嚴密に確定したる今日猶かくの如く思辨的に考ふることは甚だ無批判的非學術的と言はなければならぬ。かくの如きは恰も宗教信仰の心意的要求より得たる神の概念

をその適用の範圍を超えて物理學的現象の説明にも使用せんとするが如きものであると考へられるのである。(有機體は内的にはその各部分が所謂有機的關係を成して常に極めて密接に相關聯して居り、外的には環境(それは常に不斷に變化しつゝある)との關係も極めて密接不離であり且その變化は常に不定であるから、その生物體の全體としては勿論又その部分に就いても之れを「體系」(物理學の意味に於ける)とし、「孤立化」することは到底不可能であると考へられる(極めて特殊なる部分に就いては或程度の近似度及蓋然度に於て「孤立化」が可能であらうけれども)。従つて生物學は(原則として)物理學の範圍外と考へられ、其處には唯性質的關係が(そのみが、それとして)觀察さるゝの外はないと考へられるのである。無機界に於ても氣象地質等は不斷不定に變化しつゝあり且つ常に全體の關聯に於て具體的に觀察さるゝことを必要とするのであるから、狹義の物理學的取扱ひは恐らく不可能なのではないかと考へられるのである。従つて學術上物質には二種を區

別すべきであると思はれるのであつて、一つは電子原子等として物理學的に取扱ひ得るものであり、他は(生物體に於ける如く)純性質的のみ取扱はなければならぬものである。物質をかく二元的に見ることをせずして(無批判的に、思辨によつて)或は電子原子の一元とし、或は(物活説等の如く)生物の一元に歸する(今日にては例へばハルディン)⑤等は何れも誤りであると思ふ。(計量的物理學と物的科學或は自然科學と言ふことを直に同一とすることは許されないことであると思はれるのである。)

エネルギーなる物理學的概念も同じく物理學内のもの(従つて「孤立化せられたる體系」内に於てのみのもの)であつて物理學以外には意義を有しないものである。従つて物理學の範圍外即ち「體系の孤立化」の不可能なる範圍(例へば生物學心理學等)に於てはエネルギーを云爲すること(物理學に於けると同じ意味に於て)は許されないのである。(他の意味に於て或は比喩的に用ふることは或は差支ないことであらう。)エネルギー

不滅と言ふことも唯「孤立化せられたる體系」(即ち不變體系)に於てのみ言ひ得るのであつて、不變ならざる體系即ち性質的物界の全體或はその不定變化的なる(従つて物理學的取扱ひの及び得ざる範圍(有機體の如き)に於てはエネルギー不滅則は成立せず、之れに反するが如きことも何等差支ないのである。(吾人に直接なる性質的物界の全體が常に不定に變化しつゝあることは吾人の不斷に經驗する所であり、又吾人の身體が成長發達すると共に知覺の領域即ち物界が増大すと考へられる。従つて直接なる經驗世界に於てはエネルギーの總量は寧ろ常に變化しつゝあるとするが至當であると考へられる。エネルギー不滅則を全物界に適用せんとすることも亦同じく無批判的な「思辨」に外ならぬと思はれるのである。)

(四) 變化及因果

物界(直接なる物界)の變化には變化の一定なるものと然らざるものとがあり、細別して(一)「無」より「有」を生じ「有」が「無」に歸するが如き(不定にして且甚だ大な

る)變化(睡醒生死等の如き)、(二)天文學物理學等に於けるが如き位置的變化、(三)地質學氣象學化學等に於ける如き性質上の變化、但し無機的、(四)有機體の變化等極めて多くの種類があるのであるが、物理學によつて取扱はれ得るのは唯その(二)及(三)に屬するもののみであつて、それも狹義には體系の孤立化」が或程度迄完全に(即ち或程度の蓋然度及近似度に於て)行はれ得るものに限りるのである。數學的物理學及化學が即ち之れである。(地質學氣象學等の對象は變化が甚だ複雑且具體的であり、従つて「體系の孤立化」と言ふことが殆ど不可能であるから、之れを物理學の如く數量的函數的關係を以て言ひ表はすことは恐らく不可能ではないかと考へられる。而してまた此等の學の今日實際なしつゝある所に見てその目的本質がかゝる函數的關係を求むるにあるものとは考へ難く思はれるのである。)第一及第四の種類はその變化が甚だ具體的且不定であつて「體系の孤立化」が殆ど全く不可能であるから、之れを物理學的に取扱ふことは全く不可能であると考へられる(有機體

に就いては後述参照)。従つてかゝるものは唯性質的にそれとして觀察把握するの外はないのである。

従つて因果の概念にも種々の種類を生ずべきであつて、物理學の範圍に於ては物理學的因果即ち計量的函數的關係が成立するのであるが、他の學に於ては夫々性質的な因果關係(例へば生物學の諸法則)が成立するのである。而して物理學の所謂函數的關係なるものは所謂「體系」なる所與の性質的因果關係から導き出さるゝのであつてその基礎的本源的なる因果關係は極めて多くの性質的因果關係中の或る一項(或は一種)を成すに過ぎないのである。(猶因果の種類に就いては本文相制の項参照)。

以上述ぶる所によつて明かなる如く計量的物界は總て、性質的物界から導き出さるゝのであつて、物の本源本質は性質的なる知覺であつて物理學的物ではないのである。而して物理學によつて取扱はるゝ(否取扱はれ得る)物界の範圍はその極めて小部分に過ぎないのであ

る。物理學の世界を以て本源的なる、より大なる世界となし、知覺を以て僅かにその一部を把ふる(或は完全に、或は極めて不完全に)ものとなすとか、或はカントの如く知覺の世界と物理學の世界とを區別せず(共に一なる「現象」として)同一の平面なるかに考ふる等は何れも誤りである。また近代多くは知覺を以て直に心理的主觀的のこともなし客觀的物としては直に物理學的物的を想定するを通常とするが如くであるけれども、知覺は單に心理的精神的に止まるものではなく(本文所述の如く)知覺心(心作用)の外に知覺物物の一面があるのであり、またその知覺物物が客觀性を有ち得ることも物理學的世界と何等異なる所はないのであつて、古代素朴の時代には常に知覺物物が物として、客觀的に、措定せられたのである。今日の吾人の素朴的意識狀態否經驗に於ても亦左様である。(猶客觀性の問題に就いては哲學雜誌第五百八十二號拙稿参照。)

① 哲學研究第二百十三號「種々の時間の關係に就いて」、同第二百二十七號「時間と實在」

② ホアンカレー「科學と臆説」、マッハ「認識と誤謬」等

- ③ 上述(一)數及量の項參照
- ④ デモクリット、デカルト、カント等々(電子原子等の科學的概念の嚴密に樹立せられたのはカント以後の事に屬する)
- ⑤ J. S. Haldane は「一方、physical interpretation, in so far as we adhere to it is applicable to the whole of our perceived experience." (The philosophy of a biologist, p. 64) 等として物理學的一元たる所があると共に他方 "We are free to conclude that when we examine more completely what we at present call the inorganic world we shall find in it phenomena which are the same as those of life." (op. cit., p. 70) 等として生物學的一元たらんとしてゐる。
- ⑥ 此意味に於てオストワルドの *gesetze Energie* エドアルト・ヘルツェンの *qualitative Energetik* 等の語は何れも不當であると考へられる。
- ⑦ 「感性論」、「直觀の公理」、「經驗の類推」等參照
- ⑧ ティチエナーが「吾々は更に良く知る迄は感覺を何か物理的なものと考へる傾向がある」(Hitchner, A primer of psychology) と言つてゐるのは此事實を告ぐるものと思ふ。

三

生物學の對象に就いては如何と言ふに、先づ生物體に

物心の關係に就いて

就いては(一)それが常に具體的であり(と言ふのはその異質的多様が所謂有機的一體を成して其の各部が常に相互に極めて密接に相關係して居り、また環境とも常に密接不離に結合せられてゐる)、(二)その變化が常に不定である(生理機能に就いて見るも、自由運動に就いて見るも、また生殖發生の過程等に就いて見るもその變化は一瞬も固定することなく常に變化しつゝある。即ちその變化が絶えず變化しつゝある。「不斷の活動」「不斷の變化狀態」と言ふことが生物の最も著しき特徴として普通に擧げられるのであつて、スペンサーの有名な定義も亦これである。所謂「生命の物質的基礎」なる原形質が甚だ不均質であり且絶えず活動しつゝあること従つてその化學的分析が不可能であること等も廣く知られて居る所である。従つて近代に於ける細胞及原形質の發見は寧ろ機械説に導かずして以下述ぶる如くその具體性と不定性の故に反つて非機械説に導くのではないかと考へられるのである)。生物體を外圍環境から遮斷することは不可能であり又その或る一部を他の部分から

遮斷することも不可能である。また生物體の全體或は一部の變化を一定ならしむることも亦不可能である。

生物體がかく具體的であり且その變化が不斷不定であると言ふことは直接に、それとして、物的に（即ち所謂自然現象として）觀察せられるのであるが、また此事は物心結合（平行相制）の事實及假説からも極めて容易に理解せられる。何故となれば心は常に具體的であり且つ不斷不定に變化しつゝあるのであるから（これは直接に經驗觀察せられる）之れと一如に結合せる身體がまた同じく具體的且不定たるべきことは當然歸結せられることであるからである。即ち生物體は常に心と共に心の如く（不定に）變化しなければならぬのである。（性質的物即ち知覺には常に必ず記憶意味等の心的要素を伴ふのであるが、物理學は此等の心的要素を除去し物的要素のみを抽象固定して成立するのである。然るに生物學に於ては如何にしてもこの心的要素を除外することが出來ない。何となれば生物に於てはその心的要素が必ず何等かの物的効果を伴ふからである。）

生物體は右の如く具體的であり且不定であるから、（原理上）全體としても亦部分的にも總て「孤立化」することを得ず、「體系」（物理學的意味に於ける）が全く不可能である。従つて生物體には物理學的取扱ひが（原理上）不可能であると言はなければならぬ。但し部分的には或程度の蓋然度及近似度に於て物理學的取扱ひが可能であることは恰も全物界中部分的近似的に物理學が可能であると同様たることが出來るのである。従つて生物學は原理上たゞ性質的にのみ取扱はるべきものであつて、物理化學的處理は僅かにその一小部分に限られ従つて唯補助たるべきものに過ぎないのである。シェーファー氏の如く「生の問題が本來物質の問題なる故に生の諸現象は物質界の現象と同一の方法にて研究すべく又研究し得べきもの」と^③となすが如きは學の方法と言ふことに留意せざる甚だ非學的な立言と言はなければならぬ。（吾人は生物體を純物質的に即ち純自然科學的に觀察して以上の如く結論し得と考ふるのであるが、更に之れを心理學的に考察する時は一層此事が深く理解せられると

思ふ。)生物學中(その主要部を成す)形態學が本質的に性質的であることは特に言ふ迄もないことであるが、所謂過程機構の探究を目的とする生理學進化學等の如きものに於ても同じく性質的關係が本質的な目的關心をなすのであつて、物理學の如く函數的關係を求むることを終局の目的とするものとは考へられぬのである。(生理學に於ては刺激と興奮との關係機構が中心的重要事を成すのであるが、それは現在何れも性質的に求められて居り、またそれを以て充分満足せられてゐるのである。④)

即ち其處には別に函數的關係を求むると言ふ要求は存在せず、その求められたる性質的關係はそれとして絶對的な意義を有するのである。又進化論樹立の基礎根據を成す諸事實並にその要因機構を求むる進化學がその進化の要因として探求しつゝある所のものが何れも皆純性質的であることも周く人の知る所である。所謂生物測定學なるものも何等物理學に於ける如き函數的關係を求むることを目的として居るのではなく、唯生物の性質形態を指示する手段の一として用ひらるゝものに過ぎ

物心の關係に就いて

ざること恰も心理學に於ける時間測定の如きものなのである。病理學に於ても生物體と細菌との性質的關係を知ることを以て充分満足せられてゐるのである。物質的過程或は機構 Mechanism と言ふことと機械的 Mechanisms と言ふことは異なることであつて、生理學進化學等の求むる所は性質的な Mechanism であつて計量的な Mechanics ではないのである。) (人或は「生物體の變化の流動的曲線の不定は唯見掛け上の事即ち吾人の知覺の不完全に基くのであつて、實は無數の直線的固定的變化のモザイックに外ならぬ、夫故將來知覺及學術が充分發達すれば此モザイックを直接觀察することを得て之れを物理學によつて處理理解し得るに至る」と考ふるでもあらう。然しかくの如きは全く單なる「思辨」に止まるのであつて學術上何等の意義をも有しない。何となれば生物體を現在既にかくの如きモザイックであるとすることは既に根據なき獨斷であるが、また將來かくの如きモザイックを直接知覺するに至るであらうと考へることも亦甚しき「思辨」である。何故となれば將來知覺の發

達と共に一層多くの不定的變化を知覺するに至るであらうとも考へられるからである。)

次に生物體と無機界(外界並に體内の)との關係を考察する場合に於ても、之れを常に同一次元中に於てなすことが必要であつて、従つてそれは必然共に、性質的に考察しなければならぬのである。前者即ち生物體に就いては直接現實(Real)の性質的物を取り後者即ち無機界には間接構成(“imaginary”)の物理學的物を取る時は關係が間接遠隔となり、勢ひ多くの困難或は錯誤に陥らざるを得ざることとなる(恰かも物心論の場合の如くに)。(生物體の外圍を直に堅牢なる機械的物理學的世界となすは大なる誤りである。何んとなればそは生物體に近接せるものとして常にこれが影響を受け、その生物體と共に常に不定に變化しつゝ、あらねばならぬからである。また生體内の無機界に就いても全く同様である。而して他方生物が内外の無機界と極めて良く調和適應し常に之れを生活目的に利用しつゝ、あることは周知の事である。故に吾人は物界は生物體を中心として常に一如不定に

變化しつゝ、あるものとせられなければならぬと考ふるのである。)

生物學に於ては古來機械觀と目的觀、機械說と生氣說との對立を見てゐるのであるが、その機械觀機械說の成立せざることは上述せる所によつて甚だ明かであるが、また他方生氣說も從來の所説は何れも誤りであると考へられる。何となれば從來の生氣說は(一)物質現象を説明するにそれ自身を以てせずして(即ち學として純粹ならずして)物質以外のものを借用する(即ち「生氣」を以て物界に介入干渉せしめ、^⑤科學を不純ならしめる)、(二)「生氣」が物理學の法則を犯す、^⑥(三)「生氣」を以て歸結或は豫想とせずして現象の説明原理とする(恰かもスコラ學者が神を以て世界現象を説明せんとせる如くに)、(四)所謂「生氣」なるものの本性が不明であるか或は不可知である、^⑦(五)方法論上經驗的ならずして獨斷的思辨的であるからである。吾人は總て經驗上直接確實なるものか又は確實に歸結せらるゝものの外は學術上取ることを許されないのである。かく機械說及生氣說(從來の)

共に誤りであるが、前者が生物體に於て物理化學的に研究し得る方面あることを明かにしたること及生物界の現象を總て純物質的に（即ち自然科學として純粹に）研究することに導きたること、また後者が飽く迄生物の非機械性を固守したることに於て此兩説の史的意義が認められるのである。（生物學上目的觀の成立すべきものであることは殆ど論無き事であらうと思ふ。^⑧總て物的知覺には質料即ち單なる感覺の外常に意味形式等が之れに結合するのであるが、今生物學の對象たる生物體には必然目的統一生命維持發達等の諸形式諸アプリアオリが結合することとなるのである。然らざればそは生物學の對象となることが出来ないのである。）

また生命起源の問題に就いても機械觀（内因説）は明かに誤りである。何となればそは（一）有機と無機との同時共軛（一如）の事實（經驗的）に反する（原初本源の物界は知覺であるから有機體の存在しない所に無機物界の存在する筈は無く、また無機界無くして有機體の生存し得ざること亦甚だ明かである。廣義の物心が一如平行

物心の關係に就いて

であると共にまた無機と有機とが一如共軛を成すのである。「無機界と生命とは何れが先きなるや」^⑨との問に對しては時間上も亦論理上も常に同時であると答へなければならぬのである）、（二）生物非機械説と合致し難い（機械的ならざるものが機械的なるものから發生するとは考へ難いことである）、（三）生命發生の生物學的法則 *Law of biogenesis* に反する（今日猶これを信ぜざる人もある如くであるけれども^⑩一般には此法則は最早充分承認せられてゐるのである。而して現在 *biogenesis* を普遍的法則とし乍ら過去の一時期に於てのみ之れに反する事實を認めるが如きことは學術上許し難いことである）からである。従つて生命起源の科學的説明としては外因説 *Cosmozoa theory* が最も合理的として取るべきではないかと考へられるのである。（内因説の中には非機械的に地球其他の無機物を一種の生物と見做さんとするものがあるけれども、^⑪かくの如きは無機と有機との區別を抹殺するものであつて明かに經驗に背反する。）唯外因説に對してはそは生命の地球上の起源を

説明することは出来るとしても生命の起源其物を説明することが出来ぬではないかとの非難が投げられるのであるけれども(例へばシェーファー氏)^⑩、然し總てかゝることは科學の任務外に屬することであつて、科學は無機物界の起源に關しても何等答ふることは出来ないのである。また若し、將來生命の宇宙移行が事實として發見されるゝことも無く又その理論的可能性さへもが否定されるゝが如きことがあつたならば如何であらうかと言ふに、若し萬一かゝることがあり得たとしても吾人は毫も機械的内因説に立歸る必要はないのであつて、地球上の現生物並に古生物はその背景たる無機物界と共に畢竟唯吾人の知覺の一に過ぎないのであり、又その所謂地球生成の物理學的過程なるものは唯その一面的なる抽象構成に過ぎないのであるから、従つてその(物理學的)虛構面と之れと構成方法を異にする生物學の平面とが必然的に連續すべきことは必しも必然的に要求されないのである。また今日無機界と有機界との「進化の連續」と言ふことを以て内因説の有力なる根據となす人もある

けれども、機械的な無機界に對して進化の概念の適用す可からざることは既に多くの人によつて指摘せられてゐる所である(機械的な無機界には唯不變恒常なる函數的關係即ち方程式が存するのみである。)

- ① J. S. Haldane は co-ordinated maintenance 或は maintenance of the normal を擧げ (The philosophy of a biologist), J. A. Thomson は growth, cyclical development, effective response, and unified behaviour を擧げ (Introduction to science), H. Driesch は specific as to form, metabolism, and locomotion を擧ぐる (The science and philosophy of the organism) のであるが、外界及内界の不斷の變化に對しては生物は自ら不斷の活動變化とならざるを得ないのである。

- ② “The continual adjustment of internal relations to external relations” (Spencer, Principle of biology, Part I, Chapt. V, §30)

- ③ E. A. Schaffer, Presidential address to the British Association, Dundee, 1912.

- ④ 感官の特異機能の法則、筋肉神經の諸法則即ち悉無律、興奮傳導律等、又酵素の作用、藥物の作用等は何れも皆性質的であり、またそれを以て充分満足せられてゐるのである。今日機械論者によつては「生體に於ける調和作

用も亦明晰なる機械的説明を與へらるゝこととなつた」と言はるゝも、其處には實際何等機械的説明が與へられてゐるのではなく、唯(性質的な)物的過程が(それとして)明かにせられたに過ぎないのである。

- ⑤ 非物質的な「生氣」を以て物界に(その平面内に)介入干渉せしめることの不法なることば言ふ迄もないことであるが、また「生氣」を以て非物質とせず、生物に特有なる物質或は物力等とするものも (Reil, Treviranus, Müller, etc.) その物質或は物力が直接知覺せらるゝに非ざる限りは依然不合理たるを免れないのである。

- ⑥ ドリーシユ、ラインケ等ば之れである(本文参照)。

- ⑦ 「生物に特有なる物質又は物力」、「エンテレヒー」(アリストテレス或はドリーシユ) 等何れも直接經驗し得られず。他方心は直接經驗する所であるけれども「生氣」と心とは通常直に同一とば考へられてゐない様である。

- ⑧ カント、ロツツェ、ライプマン等々生物機械説を取るものと雖も皆等しくこれ(目的)を認めざるはならぬのである。

(ドリーシユ)はかゝる目的觀を特に static teleology と名づけて非機械的な dynamic teleology と區別してゐる)

- ⑨ 例ぐば E. v. Hartmann, Das Problem des Lebens (S. 178 ff.)

- ⑩ E. A. Schäfer (op. cit.); B. Moore (The origin and nature of life, p. 171); &c.

物心の關係に就て

- ⑪ Preyer (Theorie von der Kontinuität des Lebens); Haldane (op. cit., p. 70).

- ⑫ E. A. Schäfer, op. cit.

- ⑬ 例ぐば J. A. Thomson, op. cit., p. 142.

四

以上述ぶるが如く吾人に直接與へらるゝ物界は總て純性質的であつて、その内(規約によつて)計量的關係の定め得らるゝものと然らざるもの(即ち狹義の性質的物界)との二範圍が區別せられる。従つて物界を攻究する學即ち自然科學(吾人は自然科學をかく定義し度いと思ふ)は計量的關係を求むる學即ち物理學(化學をも含む)と性質的關係を定むることを目的とする學即ち性質的、自然科學との二種に區別しなければならぬ。(古代の Natural philosophy と Natural history 今日の physical science と natural science or natural history との區別は正しく之れに當るものと思ふ。また化學は本來性質的關係を主とするものであるけれども計量的關係を定め得ること物理學と同様であるから、之れを物理學の一種と見做すことは恐らく差支ない事であらうと思ふ。)而し

て後者即ち性質的自然科學は更に無機界に關する學(地質學^③、礦物學、氣象學等)と有機體に關する學(生物學)とに分類せられる。従つて物理學は最早(古代或は近世初期に意味せられたる如く)物界或は自然の全般に亘る學ではなく、唯その或る一部を研究する一個の學たるに過ぎないのである。(物質過程を以て直に物理化學的過程となし、生物學が純然たる物的過程の學たるべきことから之れを直に物理化學の一部門と考ふるが如きは甚しき早計獨斷である。自然は「齊一」では無く甚だ異質的不均質であつて、所謂「體系の孤立化」の不可能なる多くの領域が存在するのである。従つて物理學を以てその計量的關係を定むる「精密」科學たるの故に、之れを「自然科學の代表」或は「極致」冠冕「基礎根柢」等となすが如きは甚しく誤れるものと言はなければならぬ。)また上來の所説から自ら明かである如く自然科學には直接なる學と間接なる學との二種があつて、地質學、生物學等の如き性質的自然科學は前者であるが、物理學の如き計量的自然科學は後者に屬する。(物理學の手續方法は勿論吾人

の直接經驗する所であるけれども、その成果たる計量的關係は間接なる構成である。物理學を経験科學或は實證科學等と呼ぶ時常に此注意が必要であると思ふ。)従つてヴントの如く(自然科學の種類を右の如く區別せずして)心理學を以て直接經驗の學とし、自然科學を以て(總て)間接經驗の學となすは誤りである(性質的自然科學の直接なることは毫も心理學と異なる所はないのである。從來多くは物質界を以て外界とし従つて之れを間接とするを通例とするけれども、性質的物界の直接なることは本文所述の如くである。)又ヴントは歴史學、社會學等の精神科學をも直接經驗の學となすのであるが、此等の學に比して、進化學、發生學等の學の特に、間接たるべき理由は毫も見出し難いと思ふ(但し此處に歴史及進化論の系統發生等は夫々一つの「構成」であることに注意し置くことは必要なことであらう。)また性質的自然科學の一なる生物學に就いては之れを物理學の一部門と見做すべからざることは上述の如くであるが、又他方これを「生命の學」とすることも甚だ不適當ではないかと考へ

られる。と言ふのは生物學の實際なしつゝある所の事は（自然科學の一として）唯生物體の物的狀態並に過程に限られてゐるのであるが、之れに對して他方所謂生命なるものは（通常の用語に於て）果して單なる物的過程に過ぎざるものか否かは甚だ疑問とせられ得るからである（寧ろ多くはその反對が考へられる）。従つて自然科學としての生物學の定義としては純物質的に規定して「生物體の形態並に過程（或は機構）を（それとして純粹に）攻究する學」とするが最も適當ではないかと考へられるのである（現に今日生理學に於ては既に「生活體の生活現象の攻究を目的とす」として純物質的に定義せられてゐるのである）。而して他方若し吾人の經驗の全體（それは身心一如平行をその部分とする不可分の一者である）及之れに類似するもの（と言ふのは他人及他生物に對しては常に自己と等しき或は相似の經驗が「移入」せられるからである）を以て生命と呼ぶならば、かゝる生命を研究する學が生物を最も具體的に研究するものとして成立し得なければならぬ。而して其處には身心の關

物心の關係に就いて

係、物的環境等のみならず又文化的環境との關係等が考察せらるべきである。但しかゝる具體的なる生命の學は殆ど哲學或は形而上學と言ふに等しい。従つて今若しこれを（生命を研究し生物を研究するの故に）同じく生物學と稱するならば、單なる「自然科學としての生物學」に對して形而上學的生物學とでも名づく可きであらう。昔アリストテレスは今日の所謂生物學（吾人の所謂「自然科學としての生物學」と心理學とを分かつたずして之れを一つの生物學としたのであるが）かゝる生物學が今日成立し得ることは言ふまでもないことであり、また之れを生命の學と稱することも恐らく差支ないことであらう。然しかゝる生物學は未だ生命を完全に、説明するものと言ふことは出来ない、吾人は之れを一方今日の如く純物的なる自然科學としての生物學と精神科學としての心理學との二に分かつと共に（それは當然なる分化であると思ふ）、他方右の如き具體的なる生物學が（同じく一つの經驗學として）可能でなければならぬと考ふるのである。（即ち生物學には最も抽象的なる自然科學と

しての生物學と中間のアリストテレス的生物學と最具體的なる形而上學的生物學との三種三段階が可能であると考へられるのである。)

- ① Sedgwick and Tylor, A short history of science.
- ② 地質學が函數的關係を求むるものでは無く、性質的關係を求むるものであることは此學が「地球の歴史を研究する學」として定義せられることによつても明かである。
- ③ 田邊博士「科學概論」、谷津博士「生物學講義」等
- ④ Wundt, Grundriss der Psychologie (Einkleitung).
- ⑤ Wundt, op. cit. (茲に此等の學をかく直接經驗の學と呼ぶことの當否は暫らく論外に置く。)
- ⑥ 哲學雜誌第五百六十九號「直接經驗の哲學と形而上學」參照
- ⑦ 形而上學なる語の意味に就いては右記哲學雜誌參照
- ⑧ 今日の生理心理學は即ち之れである。